

## 現代英語の中の童話

# Goldilocks And The Three Bears

大西 博人

### 0. はじめに

人間は、その所属する集団内で体験や知識を共有し、個々の状況のもとでそれらに基づいて取るべき適切な態度が規定されている。同一集団内ではお互いに共有する部分が大きいので、つまり、価値観を共有しているため、各構成員間の意志疎通は円滑に行われる。しかし、特定の集団の枠を越えて世界中で共有されているものもある。例えば、世界的に知られている文学作品などがそれである。

このような共有されている知識体系、つまり、スキーマがコミュニケーションに必須不可欠であることは言を待たない。人はこのスキーマを前提として日常生活でコミュニケーションを図っている。

本稿では、アメリカ人のスキーマの一部を構成している童話に焦点を当て、それが現代英語の中でどのような意味で用いられているかを分析したい。童話は、ほとんどのアメリカ人が幼いときに読み聞かされてきており、共有されている知識体系の一部であると考えられる。

このような童話は数多くあるが、ここではアメリカでは一般的であるが日本では比較的知られていない *Goldilocks And The Three Bears* を取り上げる。

### 1. 童話 *The Three Bears*

古典的な童話 (fairy tales) としては、『赤ずきん』、『シンデレラ』、『ジャックと豆の木』などが日本人によく知られているが、アメリカではこれらの話と同様に、*The Story of the Three Bears* (3頭の熊物語) もよく知られている。まずは、イラストを含め4ページ足らずのこの話<sup>(註1)</sup>の概略を、重要な箇所は原文を引用し、その核心には下線を施しながら紹介する。

昔々、森の中の家に3頭の熊、a Little, Small,

Wee Bear と a Middle-sized Bear と a Great, Huge Bear が住んでいた。3頭は、各自のサイズ大中小に合ったお粥用のお碗、イス、ベッドを各々持っていた。ある日、彼らは朝食にお粥を作って各自のお碗に入れ、それが冷めるまで森へ散歩に行った。彼らが家を空けている間に、a little old Woman がその家にやって来てこっそりと入り、テーブルの上のお粥を見つけた。その凶々しい老婆は、善良な熊たちが帰って来るのを待たずに、そのお粥を次々と食べ始めた。

So first she tasted the porridge of the Great, Huge Bear, and that was too hot for her; and she said a bad word about that. And then she tasted the porridge of the Middle Bear, and that was too cold for her; and she said a bad word about that, too. And then she went to the porridge of the Little, Small, Wee Bear, and tasted that; and that was neither too hot, nor too cold, but just right; and she liked it so well, that she ate it all up: but the naughty old Woman said a bad word about the little porridge-pot, because it did not hold enough for her.

それからその小さい老婆は、大と中のイスに座ってみるが、堅すぎたり柔らかすぎたりで気に入らなかった。

And then she sate down in the chair of the Little, Small, Wee Bear, and that was neither too hard, nor too soft, but just right.

しかし、そのうちイスの底が抜けて壊れ、彼女は尻餅をつき毒づいた。それから2階へ上がり、大と中のベッドを試してみたが、枕のところが高すぎたり低すぎたりして気に入らなかった。

And then she lay down upon the bed of the

Little, Small, Wee Bear; and that was neither too high at the head, nor at the foot, but just right.

それで居心地よくベッドの中でぐっすり寝込んだ。しばらくして熊たちが帰ってきて、お粥を食べた形跡や壊れたイスに気づき、大騒ぎをした。特に、小さい熊が一番大きな金切り声を上げたので老婆は目を覚まし、熊たちが2階に上がって来たとき、寝室の窓を開けて飛び降りた。その老婆はどうなったのかはわからなかった。3頭の熊はその後彼女を一度も見かけなかった。

ここで話は終わっているが、童話としての教訓的な要素が明示的でない。この話が日本で人気でなかったのは、おそらくこのためではないかと推測される。この話が原典であるが、多種多様な変型を伴いながら変化してきた歴史を Carpenter & Prichard (1984: 524) に従い概観する。

*The Three Bears* は、Dr Daniel Dove of Doncaster の伝記と関連づけて彼の叔父 William が彼に語った形式を取る Robert Southey による雑論集 *The Doctor* に掲載された話で、1837年に初めて出版された。しかし、Joseph Cundall による1850年の *Treasury of Pleasure Books for Young Children* では、小さい老婆の代わりに 'a little girl named Silver-Hair' となっている。この作者によると、この話は 'Silver-Hair' でよりよく知られているし、老婆の話は他にもたくさんあるからと「シルバー・ヘア」という名前の少女」としたと説明している。'Silver-Hair' はしばらくすると、1858年の *Aunt Mavor's Nursery Tales* では 'Silver-Locks' となり、1868年ころの *Aunt Friendly's Nursery Book* では 'Golden Hair' と変化している。現在、この童話に一般につけられている 'Goldilocks' は John Hassall による1904年ころの *Old Nursery Stories and Rhymes* においてであったと思われる。

さらに彼らはこの話の結末について、「原典の作者 Southey さえも含めて誰も、この話の終わらせ方に確信がなかったように思える。いくらかの現代版では、Goldilocks が森に逃げ込んで終わるものもあれば、彼女が家に帰り母に事の次第を話し、以後よい子になることを約束するものもある。しかしながら、一番良い結末は、熊が彼女に罰を与える決意をするという Eleanor Mure による話であろう。」と締め

くくっている。この最後のバージョンは、教訓的であるため伝統的な童話としての形式を踏んでいる。その後、この原典は次に述べる現代版となったのである。

## 2. 現代版童話 *Goldilocks And The Three Bears*

このような変遷を経て、*Goldilocks And The Three Bears* は童話絵本として定着している。以下で、1つの現代版童話絵本<sup>(註2)</sup>を取り上げ、原典と比較するためにその概略を示したい。

長い金髪の少女 Goldilocks は森の近くの小さい家に住んでいた。母は森には行かないようにと言っていたが、ある日その忠告を忘れウサギを追いかけて森に入り、道に迷ってしまう。そのうち、Father Bear, Mother Bear, and little Baby Bear の住む小さい家にやって来た。声をかけたが、返事がないので中に入った。

The bears' breakfast was on the table, and Goldilocks was hungry. She tried the porridge in the big bowl. It was too hot. So she tried the middle-sized bowl. But the porridge in that bowl wasn't nice.

The porridge in the little bowl was just right. Goldilocks ate all Baby Bear's porridge.

彼女は、家の人たちは親切で帰り道を教えてくれるだろうと思い、待っていることにした。イスが目につき、大と中のイスを試してみたが、体にうまく合わなかった。She tried Baby Bear's chair. It was just right. これはすてきだと思って座っていると、イスは壊れて逃げ出そうとするが帰り道がわからない。2階へ上がると大中小の3つのベッドがあった。

She tried to get on to the big bed. It was too high. Then she tried the middle-sized bed. It was too soft. Goldilocks fell off the bed on to the floor.

Then she tried the baby's bed. It was just right. She lay down on it, and she was soon asleep.

熊の親子3人が帰ってきて、お粥が食べられていることに気づき騒ぎ出した。子熊は泣き出した。イスが壊れているのにまた泣き出した。寝室に上がったいき親熊はベッドが使われていることに気づき、

子熊は誰かが自分のベッドにいるのに気づいた。Goldilocksは騒ぎに目を覚まし、窓から飛び降りて逃げた。森を抜けて一直線に家へと走って帰った。

これら2つの話を比較してみると話の運びに多少の変化はあるが、双方に顕著な語句の用い方, “too hot”, “too cold”, “too high”, “too soft”と“just right”が注意を引く。そのためこの話に内在している教訓面が希薄になっているように思える。

この童話には多くのバージョンが存在するが、ここで紹介した原典と現代版との相違はその対象読者の違いを考慮すると、それが伝えている内容は本質的には同じであると考えられる。アメリカ人はほとんどが、子どものころにはこの絵本を読み聞かされ、のち原典に触れる人もあり、この童話の知識を共有している。Hirschは、「読み書き能力(literacy)」を培うのには、単なる言語形式、例えば語彙、文法、慣用句、綴り、構成原理などを教えるだけでは十分ではなく、「文化常識(cultural literacy)」を教えなければならないと主張し、5,000の文化情報項目のリストを作成しているが、その中に“Goldilocks and the Three Bears”を含めている。(E. D. Hirsch, Jr. 1987:175) ハーシュがのちに著した2版(1993:122)においてもこの項目を残し、次のように説明している。

A children's story. Goldilocks, a little girl with shiny blond hair, brashly enters the house of the Three Bears (Papa Bear, Mama Bear, and Baby Bear), eats the bears' porridge, sits in their chairs, and sleeps in their beds. When the bears return, they retrace her steps, saying, “Someone's been eating my porridge,” “Someone's been sitting in my chair,” and “Someone's been sleeping in my bed.” When they discover Goldilocks asleep in Baby Bear's bed, Goldilocks awakes and flees in terror.

ハーシュがアメリカ人が知っているべきであると主張しているこの“Goldilocks and the Three Bears”は、現代英語の中にしばしば現れる。ハーシュの説明では、Baby Bearの3つのせりふ“Someone's been eating my porridge.” “Someone's been sitting in my chair.” “Someone's been sleeping in my bed.”が強調されているが、この童話の原典や絵本の内容がどの

ような意味で用いられるのであろうか。それらを実例に従い検証することにする。なお、各実例の重要箇所には下線を施した。

### 3. ニックネームとしての“Goldilocks”

まず、*Rumpelstiltskin*とともに『ゴルディロックスと3頭の熊』がよく知られていることは、直喩を用いた次の実例がよく示している。

① “My mother was a debutante? She actually made a debut and you can recite the date? You must have quite a memory.”

“No, no, no. It's all part of the story. Everybody knows that in our family. It's like Goldilocks and the Three Bears or Rumpelstiltskin. What happened was Grand had a set of twelve sterling silver napkin rings engraved with Rita Cynthia's name and the date of her debut. ...” —Sue Grafton, “J” *Is For Judgment* (Fawcett Books, 1994), p.215.

この場合、自分の母親が社交界に出た日付を家族の誰もが知っていることを、この童話のように知られていると述べている。これが大衆に広く読まれている現代人気小説からのものであり、この話がアメリカ人の共有知識となっていることを示す。また、Goldilocksが誰でも知っている人物であるため、金髪の女性の呼び名として用いられることを次の実例が示している。

② Maxi squirmed in a primitive resistance to his words.

“Why do you persist in calling me Goldilocks?” she asked, trying to change the subject.

“Because I like the word. If your hair were all white I'd just see tiny bits of it, now and then, so I call you whatever I like. Just don't go bald. ...” —Judith Krantz, *I'll Take Manhattan* (Bantam Books, 1987), pp.106-7.

“Goldilocks”という言葉が好きだから、相手が気に入らなくてもニックネームとして使い続けている。ここでは、この名が好意的に受け取られていることがわかる。“Goldilocks”は金髪の少女であるが、次の実例に見るようにニックネームとしては男性にも用いられている。

③ ... The flamboyant and long-haired Trade and Industry secretary Michael Heseltine—formerly known as “Goldilocks” and “Tarzan,” now a gray-locked “Hezza”—said he wouldn’t stand. “I have made my position very clear,” he said ... —*Newsweek* (Jul. 3, 1995) 21

ここで問題にしている人物は、イギリスのメイジャー政権での貿易産業大臣ヘイズルタイン(Michael Heseltine 1933-)で、以前は長い金髪であったため“Goldilocks”と“Tarzan”というニックネームで知られていたが、現在ではグレーの髪の“Hezza”というニックネームとなっている旨を伝えている。これらのニックネームの実例から言えることは、“Goldilocks”の喚起するイメージが本来の童話の内容ではなく、その中の人物の髪型だけが選択的に取り上げられた形になっている。これは、アメリカ人が幼いときに少女の長い金髪が絵本という媒体によって強力な印象を与えられて、この映像が広く彼らによって共有されているからである。

“Goldilocks”が、上述のような主人公の頭髪に焦点があてられる場合もあるが、この童話の中身を踏まえて直喩として用いられることがある。最初に取り上げる実例は、この話の中に出てくる食べ物の3つのサイズを呼び起こすものである。

④ When they had finished unpacking, the three girls set off for the dining hall Bella was the first to reach the cafeteria line and loaded her plate so full with meat and vegetables that she had to balance it on the palm of her hand. Florentyna helped herself to what she considered a normal amount and Wendy managed a couple of spoonfuls of salad. Florentyna was beginning to feel they resembled Goldilocks’s three bears. —Jeffrey Archer, *The Prodigal Daughter* (Pocket Books, 1983), p.105.

この小説では、寄宿制の学校に入ったFlorentynaが2人の級友BellaとWendyと一緒にカフェテリアに行って食事を選んだところである。ベラはたくさん取り、フロレンティーナは適量取り、ウエンディーはほんの少ししか取らなかった。この3人が取った食事の量の3つのサイズが、即座にフロレンティーナにこの童話呼び起こし、自分たちをその中の3頭の熊に見たてているのである。原典では3頭の熊

のサイズが大中小と3種となっているが、ここでは食事のサイズだけが切り取られている。これは、原典にある3つのサイズという面のみに焦点をおいて、“resembled”を用いた直喩となっている。

#### 4. メタファーとしての“Goldilocks”

この話は直喩として現れることがあるが、メタファーとして用いられることのほうがはるかに多い。メタファーとして用いられるときは、原典における“neither too hot, nor too cold, but just right”の部分が切り取られて、半ば記号化されて現れる。以下でこれらの実例をいくつか紹介し、検証を加えたい。このメタファーが用いられる対象としては、「経済」が多いが、「星」にも用いられていることがある。

##### (a) 「惑星」「恒星」に用いられた場合

原典の中の“neither too hot, nor too cold, but just right”とほぼ同じ“not too hot and not too cold”が用いられていて、「星」が対象となっている実例を2つ紹介する。

⑤ Based on observations by the infrared satellite IRAS, astronomers believe that planetary systems form just about whenever stars do, says JPL astronomer Richard Terrile. Perhaps 10 percent have one Goldilocks planet—not too hot and not too cold for life. Down to 4 billion Earths. ... —*Newsweek* (Oct. 12, 1992) 43.

⑥ Astronomers took pains to point out that this research was about little brown planets, not little green men. But the message was clear. If you have a star that’s not too old and not too young, not too big and not too small, not too hot and not too cold, then it is practically inevitable that planets form around such a Goldilocks star. Planets are the first prerequisite for life. And now there are hints that the galaxy is teeming with them. ... —*Newsweek* (May 4, 1998) 45.

実例⑤では、アメリカのJPL(ジェット推進研究所)の天文学者テリルの意見であり、恒星ができるころにはいつでも惑星系が形成され、おそらくその恒星の10%は生命体にとって「適温」である1つ

の惑星を持つと述べている。そのような惑星を“Goldilocks planet”と表し、その惑星が生命体にとって「暑すぎることも寒すぎることもない」と説明し、「適当である」(“just right”)ことを言外に読者に想起させる。

実例⑥においては、⑤と同じような内容であり、天文学者の研究は小さな茶色の惑星に向けられており、古すぎも若すぎもなく、大きすぎも小さすぎもなく、暑すぎも寒すぎもない恒星を“Goldilocks star”と呼び、その周りに惑星が生まれると述べている。ここでも、適切な条件下(“just right”)の恒星のもとに惑星が生じると、「適当である」という意味の“just right”が「記号」として使われている。この実例では、「適切な」を示すために単に「寒暖」だけでなく、「新旧」と「大小」も加えて、原典とは多少とも違った言い方をして、⑤よりも勢いを与えている。これら2つの実例では、メタファーの中心的記号内容“just right”が明示されていないが、それだけ一層その伝える意味内容が強く喚起されるのである。

#### (b)「経済」に用いられた場合

この童話の表す記号内容がアメリカ経済に関する文脈で顔を出すのが、アメリカが80年代後半の景気後退から抜け出し始めた時期と一致している。次の実例では、その景気拡大を“Goldilocks expansion”と言いつけている。

⑦ Still, the Fed is now expected to sustain what Labor Secretary Robert Reich calls the “Goldilocks expansion”: it’s neither too hot nor too cold. Since early 1993, the economy has created 5 million jobs. Car and truck sales have boomed. In 1994, they’ll exceed 15 million units, the best since 1988. Meanwhile, inflation remains low; consumer prices increased by 3 percent in the past year. ... — *Newsweek* (Nov. 21, 1994) 44.

この童話の一部分“neither too hot nor too cold, but just right”を初めて経済の文脈で用いたのが、当時の労働長官ロバート・ライシュであることがわかる。インフレなき経済拡大を、「熱しすぎず冷えずの適正な経済」と言いつけている。ライシュ長官がアメリカ経済に関して用いた“Goldilocks”は、経済アナリストたちによって“Goldilocks economy”と呼ばれるようになるのである。

⑧ After more than five years of uninterrupted growth, analysts have taken to calling it the “Goldilocks economy”—an American expansion that is not too fast and not too slow but just right. Now, they are saying, Goldilocks may have gone global. ... — *Time* (Feb. 24, 1997) 44.

この実例は、ライシュ長官が経済に“Goldilocks”を用いて以来2年余り経過したころのものであるが、持続するアメリカ経済の拡大を“Goldilocks economy”と表現している。ここでは原典の“not too hot and not too cold”を“not too fast and not too slow”と言い換えて、「経済の適正な拡大」から「拡大の適正速度」と“just right”の度合いを詳しく述べている。さらに、この「適正なアメリカ経済」を“Goldilocks”という1語で言い表し、それが世界的な広がりをもたらしたかもしれないと述べている。アメリカ経済が拡大したため、世界の経済も回復したのだというアメリカ人の自負が読みとれるメタファーとなっている。しかし、1997年5月のタイ通貨バブルに浴びせられた売り攻撃に端を発してアジアの通貨不安が起こった。さらに、98年にはロシアやブラジルへと経済不安が広まった。次の実例は、その不確実性を物語っている。

⑨ So, which is it? (1) an economic slowdown that will lead to the first recession in seven years, (2) an acceleration of inflation, with the Federal Reserve slamming on the brakes and sending the stock market into the trash bin, (3) a continuation of the delightful “Goldilocks economy”—not too hot, not too cold, just right, or (4) something utterly unexpected? .... In some minds, Greenspan raised a particularly scary specter. Growth is slowing in Asia, but inflation is picking up here, and the two forces may not balance each other in Goldilocks fashion but rather coexist: stagnation *plus* inflation. ... — *U.S. News & World Report* (Aug. 3, 1998) 48.

前半でのオプション(3)では、“Goldilocks economy”(経済の適正な拡大)に“delightful”をつけているのは、この童話絵本の中の金髪の少女のイメージを呼び起こし、この経済状態がアメリカ人にとって

随分好ましいものであるという価値判断が明確に表されている。後半では米連邦準備制度理事会議長グリーンズパンのアメリカ経済に対する懸念についてのもので、“Goldilocks fashion”が用いられているが、これは“growth”と“inflation”を、童話の中のお粥の適正温度と同様に、うまくバランスを保つことという意味で用いている。つまり、一言で言うと、「インフレなき経済成長」を維持する巧みな経済運営を意味している。

アジアや南米で経済危機が生じたにもかかわらず、アメリカは財務当局と金融当局の巧みな政策により、長期間にわたる景気拡大を維持してきている。この事実は、翌年になって『タイム誌』が“THE COMMITTEE TO SAVE THE WORLD”と題するカバーストーリーで、上述のFRB議長Alan Greenspan、財務長官Robert Rubin、財務次官Larry Summersの3者が巧みな経済運営と微妙な経済の舵取りによって、アメリカ経済を長期的に安定成長に導いてきただけでなく、世界の経済危機を救ったと英雄扱いする高い評価と賛辞を贈っている。<sup>(註3)</sup> 今や、“Goldilocks”は“Goldilocks economy”として現在の微妙な経済運営に基づく好調なアメリカ経済を示す記号表現となっている。

⑩ For much of the 1990s, the “Goldilocks Economy” has provided the United States with growth that is not too hot, not too cold, but “just right” for uninterrupted, inflation-free prosperity. But as 1999 begins, the fairy tale seems to be growing more complex. Unlike Goldilocks’s bowl of porridge, which was a pleasing temperature throughout, the U.S. economy today is marked by extremes. Various leading economic indicators may still look “just right,” in other words, but they often mask troubling imbalances. —*U.S. News & World Report* (Jan. 11, 1999) 42.

この“Goldilocks economy”という記号内容は、原典の童話の話にあるお粥(porridge)の適温を反映し、“just right”である。適正な経済成長を表すのに、Goldilocksの話からの表現‘not too hot, not too cold, but “just right”’や‘Goldilocks’s bowl of porridge’を引用し、誰でも知っているこの童話イメージを喚起して“just right”に重層的な意味を

与えている。この実例が現れる記事の見出しは、“Will the Bears eat Goldilocks?”となっており、その上には大中小のベッドがある3頭の熊の家の中で、経済指標に見たてた大中小のお粥用のお碗の中の適正指標を意味する小のお碗に、金髪の少女がスプーンを入れているイラストがカラーで描かれている。ここでは文字によるイメージだけでなく映像に訴えて「適正な経済成長」を描き出している。

これらの実例で繰り返し用いられている“just right”は、決して特別な語句ではない。次の事例に見るように、アメリカ経済が「適度ないい状態にある」ことを述べるのに“just right”が現れている。⑪ Mae West’s aphorism “too much of a good thing can be wonderful” sums up the performance of the American economy just right. Everything you want up is up—jobs, incomes, investment, productivity, the stock market, the overall economy. And everything you want down is down—the unemployment rate, inflation, interest rates. ... —*U.S. News & World Report* (May 17, 1999) 72.

このように“just right”は、アメリカ人が“Goldilocks”の童話を知識として共有しているので、その中の語句“not too hot, not too cold”などが言及されていなくてもこの童話を喚起し、アメリカ経済を的確に認知できるのであろう。

オグデンとリチャーズ(Ogden and Richards 1972: 149)によれば、日常言語には大きく分けて、真あるいは偽を表す言明を行うシンボリック(symbolic)使用と、聞き手の側にある感情や態度を表現したり引き起こす情動的(emotive)使用の2つがあると述べているが、これらの実例の場合は、シンボリックかつ情動的使用の両方を兼ねていると考えられる。

## 5. まとめ

この童話の原典*The Three Bears*や現代版*Goldilocks And The Three Bears*には、童話の性格上、教訓があって当然である。しかし、この話に込められた教訓について諸説があり、未だ説得力のある説明に乏しい。この原典では、主人公が金髪の少女ではなく老婆であるため教訓的な内容は不明快である。ノートン(Norton 1987: 215)は、*The*

*Three Bears* はいろいろな版があるが、それらはいずれも幼児に対して「大きさの概念 (size concepts)」を養うためではないかと述べている。この話の話題になっている「熊」「お粥」「イス」「ベッド」が、それぞれ大・中・小と3つのサイズに繰り返し注意が払われていることを考えると、この指摘は妥当性をもつものと言える。

現代版でも、この「大きさの概念」はイラストで強調されていて、原典の趣旨をより多くの絵により引き継いでいる。さらに、ここでは主人公が長い金髪の少女であり、幼児や就学前児童を対象とした易しく短い英文で書かれた絵本であることからすると、何か教訓があって当然であろう。この話の初めは *Goldilocks lived in a small house near a forest. The house had a little garden, and Goldilocks liked to play there. "But don't go into the forest," her mother said.* で始まり、*Goldilocks was very glad to be home. You can be sure she never went into the forest alone again.* で終わっている。この始まりと終わりから引き出される教訓は、母の言ったことを守らずに森に行ってトラブルを引き起こしたことを考えると、「母の忠告には従うべきである」ということになるであろう。しかし、この童話が現代英語の中でメタファーとして用いられるとき、これらの教訓や教育的意図は現れていない。

本稿では、この話の内容や場面は、どのような形でアメリカ人一般に共有知識(スキーマ)として沈殿しているのかを、現代英語のディスコースを通して検証した。その現れ方には2通りあった。1つは、その主人公である長い金髪の少女のイメージが強調されて、事例②と③に見られるようなニックネームとしての現れ方である。

もう1つは、この話の3つのお碗に入れられているお粥の温度のうちで「適温である」お碗の部分が切り取られ強調され、「just right」(最適状態)の2語がメタファー的な記号として用いられている点である。その記号は、「星」や「経済」に対して用いられることを事例⑤～⑩で見えてきた。「最適状態」を表現するのに、なぜこの童話からの語句“Goldilocks”や“not too hot, not too cold, but just right”が用いられるのであろうか。

特に、事例⑧～⑩に見られるメタファー

“Goldilocks economy”に焦点を置いて考察してみると、⑧において、経済アナリストが経済拡大が「速すぎでも遅すぎでもなく適度である」のを、“Goldilocks economy”と呼んでいることを紹介したが、わざわざ童話の主人公“Goldilocks”を持ち出さなくても不自由はないはずである。⑨⑩でも、経済活動が「加熱すぎでも冷えすぎでもなく適度である(not too hot, not too cold, just right)」と言い表し、この童話で繰り返し用いられている表現とともに「適正な経済状況」を“Goldilocks economy”と述べている。つまり、これは、理解される観念(tenor)「アメリカ経済」を、表現された観念(vehicle)“Goldilocks economy”で、両者が比較されるもの(ground)「適正な状況」を表すメタファーである。(註4)

事例⑩では、“Goldilocks”も“not too hot, not too cold”も現れず、アメリカ経済を“just right”と言い表している。これは一見して文字どおりの表現のように思えるが、この時点までニュース誌などでメタファー“Goldilocks economy”が繰り返し用いられてきていたために、“just right”自体がこのメタファーを代用する語句となっていると考えられる。つまり、“just right”がこの童話のスキーマを喚起し、この語句がメタファー化しているのである。

ここまで“Goldilocks”のメタファーが現れた事例を検証してきたが、なぜ文字どおりの表現で事足りることにメタファーを好んで用いるのであろうか。その理由はメタファーに有効な機能があるからである。Paivio (1984: 152) は、メタファーの一般的な機能に3つの仮説を立てている。彼によると、メタファーは認知的諸特徴の下部単位を表象する簡略化した方法であり、文字どおりに表現できない我々の経験を述べてくれ、認識された経験がイメージをおおして感情が喚起され、鮮明で忘れられない表象がなされる。また、Ortony (1980: 78) は、「メタファーは、文字どおりの同等表現が仮にあるとしても、それらよりもよりイメージを喚起し、より鮮明である」と考える現象学的心理学的理由がある」と説いている。つまり、「適正な状況」を述べる場合、単に“just right”と表現するのではなく、“Goldilocks”を持ち出すことによってこの童話の中の長い金髪の少女が適温のお粥を試す場面をイメージとして読者に想起させ、アメリカ経済の微妙かつ巧妙な舵取りの結果

としての「適正な状況」を鮮明に喚起している。

このようにメタファーが用いられるのは、Lakoff & Johnsonが指摘するとおり、「われわれが普段、ものを考えたり行動したりする際に基づいている概念体系の本質は、根本的にはメタファーによって成り立っている(1986:3)」のであって、「メタファーは理解という人間の行為にとって欠くべからざるもの(1986:277)」であるからであろう。

この童話の一場面が焦点化され、メタファーとして人間の現実理解を容易にしてくれる過程を検証したが、そのメタファーはある集団によって共有された知識でなければ成り立たない。その点、童話はほぼすべての人が持っている共有知識といえる。アメリカ文化を研究するうえで童話も有効であると考えられる。なぜならば、「子ども用の素材には、文化的背景として共有している世界についての基本的な理想や価値や前提がすべて含まれている(本名ほか1994:23)」からである。

#### 注

1. Iona Opie, and Peter Opie, *The Classic Fairy Tales* (Oxford: Oxford UP, 1995), pp.201-4.
2. Bill Melendez Productions Limited, *Goldilocks And The Three Bears* (Harlow, England: Longman House, 1990) Pp.32.
3. Joshua Cooper Ramo, "THE THREE MARKETTEERS," *Time* (February 15, 1999), 34-42.
4. リチャーズ(I. A. Richards 1979:93-100)は、自分の提唱したメタファー理論で、比較されるものを“tenor”, 比較されるために持ち込んだものを“vehicle”, 両者が比較されるものを“ground”と呼んでいる。この理論は、その後「相互作用説」として継承されている。

#### 参考文献

- Briggs, Katharine M. (1991) *A DICTIONARY OF BRITISH FOLK-TALES IN THE ENGLISH LANGUAGE*. 1970. London: Routledge.
- Carpenter, Humphrey, and Mari Prichard. (1984) *The Oxford Companion to Children's Literature*. Oxford: Oxford UP.
- Hirsch, Jr., E. D. (1987) *Cultural Literacy*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- ... (1993) *The Dictionary of Cultural Literacy*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- 本名信行 / ベイツ・ホッフア / 秋山高二 / 竹下裕子 (1994)『異文化理解とコミュニケーション 1—ことばと文化』三修社。
- Lakoff, G., and M. Johnson. 渡部昇一 / 楠瀬淳三 / 下谷和幸(共訳) (1986)『レトリックと人生』大修館書店。
- Norton, Donna E. (1987) *Through The Eyes Of A Child*. 1983. Columbus, Ohio: Merrill Publishing Company.
- Ogden, C. K., and I. A. Richards. (1972) *The Meaning of Meaning*. 1923. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Ortony, Andrew. (1980) "Some Psycholinguistic Aspects of Metaphor." *Cognition and Figurative Language*. Ed. Richard P. Honeck, and Robert R. Hoffman. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Paivio, Allan. (1984) "Psychological Processes in the Comprehension of Metaphor." *Metaphor and Thought*. 1979. Ed. Andrew Ortony. Cambridge: Cambridge UP.
- Richards, I. A. (1979) *The Philosophy of Rhetoric*. 1936. Oxford: Oxford UP.